わすれぐさ

梅花空木

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
わすれぐさ

【Ｎコード】
Ｎ９３６５Ｈ

【作者名】
梅花空木

【あらすじ】
犬神の使役人である白児（しらちご）の萱草（かんぞう）は、主と自らの居場所を求め、異能の民を受け入れ、力を活かす場所を与えるという陰陽寮をまとめる緋褪（ひざめ）の許へと赴く。

「白児(しらちご)よ…名はなんというのかの？」目の前の怪しい人物は、和菓子を美味しそうに頬張りながら、問いかけてきた。
「名は…俺にとって意味を成さぬもの。名乗る必要もない。」
「ほっほっほっ。まぁそう言わずに。名を知らないと、呼ぶに困るだろう？」口元に（と言ってもそこしか見えないのだが）笑みをたたえてその人物は言う。
「……。」
「私を警戒しておるのかの？…あぁ、名乗るのを忘れておった。私の名は、緋褪(ひざめ)。
皆からは、緋ィ様と呼ばれておる。」
「……。」
「まだ信用できないかの。」しょんぼりした様子で緋褪が言う。
「……萱草(かんぞう)…。」当たり前だと思ったが、取り敢えず名乗る。
「ほぅ…。わすれぐさ…か。良い名をもらったものだ。」ぼそりと呟き、にんまり緋褪が笑う。
「…？…。」
「萱草よ…その名の意味を知っているかの？萱草とは、わすれぐさと言って、過去の憂いを忘れさせてくれる草の名じゃ。何故その良い名を意味を成さぬと言う？」
「…名付けてくれた家族ももういないし、呼んでくれる友もいない。唯一名を知っている我が主は、俺から離れていった…。」
「ほぅ。そうさのー確かに、呼んでくれる存在がないと、名は意味を成さぬ。私も呆れる程長生きしすぎて、家族や友はもういない。しかし、まだ我が名を呼んでくれる者たちがいる。そういう者がいる限り、私はこうして生きていける。どうかの？私についてくれば、その名を意味を持つものにしてやるが？」
「…？」

「ほっほっほっ。話が難しかったかの？つまりは、私と一緒に妖退治を行なってくれたら、家族や友の代わりに私がそなたの名を呼ぼうということだの。」
「……っ！」物好きな輩だと思ったが、名を呼んでくれるというのが、何より嬉しかった。
「どうかのう。良い話であろう？」満足気な笑みを浮かべて緋褪が言う。

「…緋ィ様？」緋褪の視線に気づき、問いかける。
「いやいや、あの手負いの獣が良く育ったものだと思っての。ほっほっほっ。」感慨深げに緋褪が言う。
「……っ！むっ…昔のことは、忘れてください！！」幼い頃の話は嫌いだ。緋ィ様にたくさんの無礼を働いていて、恥ずかしいことこの上ない。
「ほっほっ。私の生きてきた年月に比べれば、そんな昔のことではないがの。ほっほっほっ。」
「緋褪様！からかわないで下さい！！」わかっているのに、つい本気で怒鳴ってしまう。
「ほっほっ。良いではないか、萱草。人間は不変なものなどではない。恥じることなどありはしないのだから、胸を張っていなさい。そなたが感情を露にできるようになってくれたことが、私は何より嬉しいのだ。」緋褪が慈しむように笑う。
（緋ィ様は捉えどころがない…。しかし、緋ィ様が良いと言えば、良いと思えてくる。そして何処か人を惹き付ける魅力を持った不思議なお方だ…。）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9365h/

わすれぐさ

2011年1月1日02時58分発行